

百人一首を書きましよう。

世の中は常にもがもな渚漕ぐ

海人の小舟の綱手かなしも

鎌倉右大臣

み吉野の山の秋風さよ更けて

ふるさと寒く衣打つなり

参議雅経

おほけなく憂き世の民におほふかな

わが立つ杣に墨染の袖

前大僧正慈円

花さそふ嵐の庭の雪ならで

ふりゆくものはわが身なりけり

入道前太政大臣

【現代語訳】

世の中はいつまでも変わらずにあって欲しいものだ。渚を漕ぐ漁師の小舟が綱手に引かれて、光景は、なんとも感慨深い。

【現代語訳】

吉野の山から秋風が吹き、夜は更けて夜寒の古都吉野では、衣を打つ砧の音が寒々と聞こえてくることだ。

【現代語訳】

わが身に過ぎたことながら、このつらい世を生きる民の上に覆いかけることです。比叡山に住みはじめた私の、この墨染めの衣の袖を。

【現代語訳】

花を誘って散らす嵐の庭は、花が雪のように降るが、ふりゆくのはわが身なのだなあ。